# 新しい時代　新文化運動と哲学

## 永遠なる生命への正しい道

みな知っている通り、聖書は人類に永生を与えんとする偉大な救世のメッセージが含まれている本である。聖書の主題は始めから終わりまで永生であり、永生をなすため歩むべき心の道を提示した本である。故に、聖書は科学書籍のごとく論理的に著述されたものではない。人間が神にいたるため歩くべき心の各階段を表現し記録した本である。

聖書は始めから終わりまで、生命の神と死亡の神（魔鬼）との熾烈な戦闘を描いており、結局、神が敵の魔鬼（悪魔）に勝利を得るという預言的なメッセージを含んでいるのだ。従って、神さまが死の神、悪魔に勝利したときに永生がなされ、永生のうちに救いがあるということが聖書の主要骨子である。

罪の報いで死ぬというのだから罪を解決できれば人間が死なない条件が成立するのである。

生命である聖なる神の道は永生の道である。

神の意志は永生のなかにあり、永生こそが神の意志の成就なのである。

聖書的にみれば、罪の報いで死ぬ、罪の報いで地獄に落ちる、といっているから、死の原因は罪のためであることがわかり、地獄に落ちるのも罪であることがわかるのだ。

だから、罪さえ解決することができれば死なないし、罪さえ除去すれば死なない神の世界、永生の世界が成就することを聖書は教えているのである。

死なない条件さえあれば、それは罪を解決したことの反証が成立したことになり、死にたくても死ねない存在に化した人がいたとすれば、かれは神に昇格した者である証拠になるのである。なぜなら、神は死のない存在で生命の神であるから神であればこそ永生することができるからである。

仏教や道教でも同じことである。かれらも神仙になること、成仏することを願っており、神仙に昇格すれば不老不死の世界が成就することを信じているのだ。このように、すべての宗教やすべての経典は永生の世界を追求しており、永生世界をこの地に築くため、いろいろと努力している足跡である。

## 4、聖書でいう永生は生きている者の永生である

“あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べている”（ヨハネによる福音書５：３９）

このように聖書は明白に永生をその主題にしている。祈祷文の終わりにも永遠に生きることを信じるように教えているのだ。ところが今日、聖書を信ずるという多くの人は、“永生は死後の世界の幻想的なもの”だと錯覚していることは、本来の意味から聖書の意がいかに歪曲されているかがわかるのである。

確かに、聖書には永生は死後の永生ではないのだ。なぜなら、聖なる神は死者とはなんら関係のない神であるからだ。

“神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である”（ルカによる福音書２０：３８）

聖書は死後の永生ではない、生きたままで永生することが神の真の意志であるのを重ねて強調している。“あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。しかし、天から下ってきた生きたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。”（ヨハネによる福音書６：４９）

“わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。”（ヨハネによる福音書１１：２５）

“この腐るものが腐らず、この死ぬものが死なざるものを被るとき、死が勝利に呑みこまれることになろう”

上の句を何回も吟味してみよ。これは、どの角度からみても、死後ゆく天国や、死後ゆく永生をいうのでは決してないことがわかる。

神の目的は有限な人生を永生に導くことにあり、聖書の目的は罪悪の中にいる人生を罪から救いだすところに目的がある。また、罪を解決するのが聖書の目的だけでなく、罪を解決することにより人間の永生がなされるので、神の目的もまた完成するのである。

だが、いままで聖人とか賢人とか言われた人たちは、死の原因も知らずに死を超越するとか、肉体は死んでも心は死なないとかの、荒唐無稽な言葉で人生の根本問題を濁し、死後、天国に行けるようにしてあげるとか、死んだら極楽に行けるようにしてあげるなどの来世説を持ちだして宗教という名の下に大衆を愚弄しているが、これは神の顔に泥を塗るような行為だと言わざるを得ない。

元来、聖書には死んで天国に行くのではなく、天国が天にある宮殿のようなものでもないことを判然と言っているのだ。“天国はここにあり、あそこにあるに非ず、汝の中にあるなり”と明らかに釘を刺しているにも拘らず、いままで人間の目が魔鬼の幻惑の中にあったので、聖書の中の真実を見ることができなかったのである。

そこで皆さんが、まず知らなければならないことは、霊肉は一体であるという事実である。霊肉一体を論ぜず、霊肉を分離して論ずることは、すべて非論理であり、非聖書的な教えであるということであろう。

本来、聖書は霊肉分離説で記録したのでなく、霊肉一体に記録されているのだ。ところが、今日の聖書学者たちが聖書の真意を知らないものだから、霊肉一体であることを悟れず、いろいろな矛盾がからまっているにも拘わらず、聖書をして、鼻にかければ鼻飾り、耳にかければ耳飾り式に解釈しているのである。

## 二、不老不死、永生の道

聖書は人々に神になることを教えており、神になることにより救われると言っている。だが、罪人の身では永生することはできないのだ。神であればこそ永生することができるし、神であればこそ天国に入ることができるのである。罪人が一時的に神を信じたからといって天国に行くことはできず、罪人の殻を脱いで神になることにより救いがあるのである。

従って、罪人を救うことのできる者は、ただ、死亡の霊に打ち勝って罪人の身から抜け出た“勝利者＝聖神”だけが、罪人を救うことができる資格があるのだ。

前回に述べたここの、勝利者の中に、魔鬼に勝利した聖神がいるので、「死」に勝ち、死に打ち勝った勝利者がいるので、20世紀後半から世界万民たちを一人ずつ魔獄から釈放し、不老不死の地上天国を建設しているのを判る。

## 1、三神山の不老草

死ぬべき人生を救い永生させてくれる救世主の出現に関し、東洋の古書にも詳細に表現されているので読者たちを驚かせている。

諸子百家の哲学が盛んだった春秋戦国を統一した秦の始皇帝は、万里の長城を構築し梵書坑儒の如き無謀を重ねながら放蕩無道な贅沢三昧に耽った。その彼が晩年に、死が目前に迫ったのを感じ、死を解決する方法を考えて道家思想に心酔するようになった。

道家思想に心酔した彼は、一度食べれば老いずに死なないといわれる三神山の不老草を求めるため、童男童女五〇〇組を韓半島に派遣したという記録がある。

秦始皇だけではない。漢武帝も王位に即くや、三神山に行って不死薬を求めてくるよう指示した記録があるというから、道家の多くの道人たちは実際に、韓半島に不老不死の世界があるものと信じていたことがわかる。

史記には、「東方の渤海に神仙たちが住んでいる神山があるが、そこに不老不死の仙薬がある」と言った。このような記録は＜山海経＞など多くの記録が伝えているところである。

## 2、君子不死の国

古くから韓国は東方礼儀之国であり、君子不老之国として、三神山があるという渤海の国と称せられた。

世界四大聖人の一人と称せられた孔子も社会が混乱しているとき、「海の彼方、渤海に行って住みたい」と言ったし、後漢書の著者も韓国を指して「東夷は中国が礼節を失したとき、これを救いに来る国」だとした。

このように、韓民族の歴史を紐解き、韓国人の品性を見るとき、誠に善良かつ温和なので、一度も他国を侵犯し占領したこともなく、村に困っている人がいれば、わがことのように心配し助ける信義があったのである。また、真理を探究する人を高く評価しソンビ（仙人）と称揚する道徳君子の国である。当時の中国人からすれば、韓国民族の先祖たちは、かれらとは骨格の違う白衣民族であり、天孫民族として密かに羨望していたことがわかる。

あらゆる古書の主題は老いず死なない永生の正道

韓国民族は“天性が柔順で道に導き易い”優秀な品性の持主で、古くから各地で天の道を研磨する仙人君子が多く、偉大な先覚聖賢も無限に出現したのである。

道を悟った道人たちは、かれらが見通した完成した世界を予見し、その世界を文字にしてのこしているので、これから、その古書を調べてみることにする。

われわれはよく、このような預言書や古書を単なる伝説だとか、或いは未来を占う予言書以上には考えていなかったのであるが、いまや、永生学という新しい学問が登場した時点において、これらの古書を新しい視点で再検討しなければならない時期に至ったのである。

なぜなら、多くの古書が共通的に強調している核心的主題は、即ち、人間が老いず死なないという永生道の出現を預言しているからである。

われわれは、古文書の中から永生に関する驚くべきメッセージを無数に発見することができる。『鄭鑑録』や多くの韓国秘訣書の中で最も核心的な預言書として、的中する預言が多く記録されているといわれる『格菴遺録』の場合、ほとんど各章ごとに永生道について言及している。つまり、永生が最も重要なキーポイントであり、“永生を与える者が正道霊”であるということを重ねて強調している。*

次の号に引き続き掲載

Subaru Kan / 新人類文化研究所長

# 계룡산(정도령)위에 갑을각(甲乙閣)을 세우리라

격암유록 新 해설
최종회

## 甲乙歌 갑을가

鷄龍山上甲乙閣 계룡산상갑을각
重大責任六十一 중대책임륙십일
六十一歲三五運 륙십일세삼오운
名振四海誰可知 명진사해수가지
鷄龍山上甲乙閣 계룡산상갑을각
紫霞貴日火虹天 자하관일화홍천
六十一歲始作立 륙십일세시작립
走肖杜牛自癸來 주초두우자계래
左衝右突輔眞主 좌충우돌보진주
所向無敵東西伐 소향무적동서벌
沙中紛賊今安在 사중분적금안재
落落天賜劍頭風 락락천사검두풍
天門開戶進奠邑 천문개호진전읍
地開草出退李亡 지개초출퇴이망

계룡산(정도령)위에 갑을각(甲乙閣)을 세우리라. 정도령이 갑을에 새로운 시대를 열게 되는 것을 암시하고 있다. 중대한 책임이 육십일에 있느니라. 계룡성인 정도령이 육십일 세에 십오진주(十五眞主)의 운으로 이름을 사해(四海)에 떨치게 되는 것을 누가 알겠는가? 계룡산상(정도령)에 갑을각을 세우니 자하도 남쪽 하늘엔 무지개가 해를 관통하는구나. 갑을의 해에 경사스러운 일이 있음을 짐작할 수 있다. 육십일 세에 갑을각을 세우는 일을 시작하나니 조(趙=走肖)는 정도령(鄭趙之變一人矣)을, 두우(杜牛=斗牛)는 북두칠성을 나타낸다. 계(癸)는 천간의 마지막이니 마지막 주인공이라는 말이다. 풀이하면 정도령(북두칠성)이 마지막 주인공으로 오는데 좌충우돌하면서 진주(眞主=참구세주)를 보필하여야 하느니라. 정도령이 동서의 적을 정벌하니 천하무적이니라. 소사(素砂)에서 분쟁을 일으키던 마귀들이 지금은 편안히 있는 것 같지만 하늘이 내리는 천사검(天賜劍)에 머리가 떨어지니 추풍낙엽이로다. 하늘의 문이 열리고 땅이 열리면 풀이 나오듯이 정도령이 나오면 이(李)는 물러가고 망하느니라. 천지개벽이 되면 이씨의 시대는 끝나고 정도령이 나온다는 말이다. 이씨 조선은 임신년부터 을사년까지이고 이후는 정도령 시대가 된다는 말이다. 갑을가는 이를 말해 주고 있다.

人皆弓弓去 인개궁궁거
我亦矢矢來 아역시시래
先天次覺甲乙閣 선천차각갑을각
時乎時乎不再來 시호시호부재래
木子論榮三聖安 목자론영삼성안
走肖伏劍四禍收 주초복검사화수
非衣元功配太廟 비의원공배태묘
人王孤忠哀後世 인왕고충애후세
非上非下亦非外 비상비하역비외
依仁依智莫依勢 의인의지막의세
先進有淚後進歌 선진유루후진가
白榜馬角紅榜牛 백방마각홍방우
坐三立三玉璽移 좌삼립삼옥새이
去一來一今佛頭 거일래일금불두
俗離安坐有像人 속리안좌유상인
德裕喚起無鬚賊 덕유환기무수적
山北應被古月患 산북응피고월환
山南必有人委變 산남필유인위변
誰知江南第一人 수지강남제일인
潛伏山頭震世間 잠복산두진세간
其竹其竹去前路 기죽기죽거전로
前路前路松松開 전로전로송송개
名振四海六十一歲 명진사해륙십일세
立身揚名亦後臥 입신양명역후와
非三五運雲霄閣 비삼오운운소각

사람들이 모두 활활 가지만 나 하나님은 살살 오리라. 먼저 하나님이 좌정한 정도령의 불사영생의 진리를 배우고 다음으로 갑을각을 깨달아야 하리라. 때여! 때여! 두 번 다시 오지 않을 때여! 목운의 아들(정도령)을 말하자면 삼성합일(三聖合一)하여 영광의 빛으로 편안히 거하시니라. 조(趙=走肖=曺) 즉 정도령이 숨겨둔 용천검으로 네 가지의 재앙을 거두고 육신의 옷을 벗어 불사영생하는 진리를 가르쳐준 으뜸가는 공적은 태묘(太廟)에 모셔지리라. 인왕(人王=정도령)이 홀로 충심을 바쳐 인생들을 구원하나니 후세 사람들은 크나큰 은공을 생각하고 정도령의 충정을 애처로워하리라. 불사영생의 참 진리는 위에 있는 것도 아니요 아래에 있는 것도 아니요 또한 밖에 있는 것도 아니니라. 오직 사랑(仁)과 지혜에 의지하되 권세나 형세에는 기대지 말라 하느니라. 처음에는 조롱과 반대로 힘겨워 눈물을 흘리며 나아가지만 나중에는 기쁜 노래를 힘차게 부르며 나아가리라.

백방(白榜)의 말(午)에 뿔이 나니 홍방(紅榜)의 소(牛)가 되리로다. 마두우각(馬頭牛角)과 같은 말이다. 하나님이 우성인(牛性人)으로 나타남을 말한다. 갑을의 운이 들어옴으로써 지귀(地鬼)가 권좌에서 내려오고 좌삼우삼(坐三立三=田) 즉 십승 정도령에게 천국의 옥새(玉璽)가 옮겨지리라. 지귀(地鬼)의 운이 가고 천신(天神)의 운이 옴에 미륵불의 머리에 영광의 금빛이 발(發)하나니 속세를 떠나 편안하게 좌정한 사람의 모습이로다. 덕을 널리 펼치니 수염이 텁수룩한 도적이 없어지고 모두 마음을 고치게 되느니라. 산의 북쪽은 오랑캐의 환란(병자호란)을 입을 것이요. 고월(古月)은 호(胡)의 파자. 산의 남쪽은 왜변(倭變=人委變)이 있으리라. 강남(남조선)에서 제일가는 분을 누가 알겠는가? 산꼭대기에 몰래 숨어 자신을 드러내지 않고도 세상을 진동시키는구나. 정도령의 말씀 그대로 그대로 앞길을 가기만 하면 앞길이 절로 절로 솔솔 열리리라. 정도령이 육 십일세에 그 이름을 사해에 떨치고 입신하여 이름을 날린 후 육신을 벗어 버리느니라. 십오 진주의 운수가 아니면 하늘의 구름위에 높이 솟은 갑을각을 세우지 못하리라.

六十一歲無前程可憐可憐六十一歲
육십일세무전정가련가련륙십일세
反目木人可笑可笑 반목목인가소가소
六十一歲成功時 육십일세성공시
大廈天間建立匠 대하천간건립장
自子至亥具成時 자자지해구성시
原子化變爲食物 원자화변위식물

육십일 세의 앞길이 험난하리라. 가련하고 가련한 육십일 세로다. 갑을운수에 오신 하늘의 사람을 반목하다니 어처구니가 없구나. 육십일 세 성공 시에는 천간(千間)이나 되는 큰 집을 세우는 명장이 되시느니라. 자(子)에서 해(亥)까지 잘 갖추어 이루어지면 원자가 먹을 음식으로 변하게 되니 바로 불로초와 불사약이니라. 즉 자에서 해까지 정도령의 진리를 자신 속에서 구현해나가면 불로초 불사약인 감로해인을 먹고 불사영생하게 되리라는 말이다.* - 끝 -

박명하 /고서연구가
myunghpark23@naver.com
010-3912-5953

편집자 주: 여러 구독자님들께서 애독해 주신 격암유록 신해설이 이번 호로서 끝이 되었습니다. 지금까지 애독해 주신 구독자 여러분께 감사의 말씀을 올립니다. 아울러 『격암유록 신해설』이라는 이름으로 출판되었으니 참고 바랍니다.

**당신**을 **영생**의 **세계**로 **안내**하는 **신문**

성금계좌 : 우체국 103747-02-134421 예금주 : 이승우

**승리신문은 독자님들의 정성어린 성금으로 만들어집니다**
**전국 각지에서 성금을 보내주신 분께 감사드립니다**

승리신문 1990.3.3 등록번호 다 - 0029

발행인 겸 편집인 김종만

본지는 구세주(정도령, 미륵불)께서 말씀하신 사람몸이 실제로 죽지않는 원리(영생학)를 누구든지 쉽게 배우고 실천할 수 있도록 소개하여 질병과 죽음이 없는 개벽된 세상을 만들고 진정한 평화의 세계를 구현하는데 기여함을 목적으로 발행됩니다.

경기도 부천시 소사구 안곡로 205번길 37
우 14679
홈페이지 www.victor.or.kr

광고 및 구독신청
전화 032) 343-9985
FAX 032) 349-0202

본지는 신문윤리강령 및 그 실천요강을 준수합니다.